



TITLE:

人間の現在 --哲学的省察-- (一)

AUTHOR(S):

石井, 誠士

CITATION:

石井, 誠士. 人間の現在 --哲学的省察-- (一). 京都大学医療技術短期大学
部紀要 1985, 5: 73-87

ISSUE DATE:

1985

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49300>

RIGHT:

The Presence of Human Being

—Philosophical Meditation—

Seishi ISHII

ABSTRACT: The Article is a philosophical attempt to make the sense of human being in the present situation of the world clear.

The most conspicuous character of man in the modern ages and its world seems to be found in the tendency to differentiation or split of the way of being which exists in the being of man, the world of his objects and the sciences as his cognition. We can characterize the modern ages as the time when the tendency to split of being developed in all aspect of human life and then the present age as the time when this tendency has become problematic for man as himself and we have begun to be conscious of the problematic and critical character of human being and its development.

In this first part of the article we examine the essential problems of man in the present age in regard to the split of his being. The split will be found in the field of education. It will be found in the field medicine and environment too.

人間の現在

—— 哲学的省察 —— (一)

石井 誠士

第一章 現代という時代

—— 人間の存在が問いになっている時代

第一節 問いとしての人間

現代という時代を考えると、私は、現代は人間の存在が世界の全体と一つに大きな問いになっている時代である、と言えると思う。

無論、人間の存在が問いになるということは、現代において初めて起ったことではない。人類の歴史において、それは絶えず起ったことである。人間の存在への問いは、人類の歴史と同じ位に古い。

例えば、我々は、今日、考古学のお蔭で、石器時代の人間が彼等の住居であった洞窟の壁や種々の道具の表面に描いた色んな種類の紋様を知っている。それらは、ちょっと見ただけでは、今日の人には、一体何を、何のために描いたのか把握することが不可能であるような様な形象である。それらを描いた意図も、描かれたものの意味も我々には隠されているのであるが、それでも、それらが人間によって描か

れたものであることは明らかである。それがどうして人間によって描かれたものであることが明らかかというと、それは、我々が直観的にそうだと知ることができるからである。人間の描いたものは人間によつて知られる。そもそも「描く」という行為が既に人間固有のものである。「描く」という行為に我々は「人間の現在」を見る。石器時代の人間が洞窟の壁に色んな紋様を描いたとき、彼等はそれによつて彼等自身を、彼等が何物であるかを示したのである。彼等は自分が表出したものにおいて自分自身を認めた。おそらく、彼等は「描く」行為から限りなき喜びを得たであろう。自らの手が次々に、多様な形象を生み出すことに夢中になり、幸福を、存在の充実を覚えたことであろう。つまり、彼等は「描く」行為において自己の存在を確認したのである。

このように見るならば、我々は、石器時代人が遺したちょっとした紋様のようなものにおいても、人間の人間自身の存在への問いと答えとを認めることができる。描く前、形象を表出する前の人間には、自己の存在に空虚が有った。そして、この空虚は、「描く」という行為によつて充されることになった。描く前の人間において、問いであったものが、「描く」行為によつて答えられた。我々は、洞窟の壁画や土器の上の模様を見ると、そこに、石器時代人の人間の存在への問いと答えを確認することができるのである。

同様に、人類の歴史と同じ程古い神話、ミュトスも、人間の存在への問いと答えをなす、と考えることができる。あらゆる神話は、人間の自己理解、人間が世界の中に有るその存在の意味の象徴的表

現に他ならない。そのような象徴的表現、そのような自己理解には、それと一つに、人間の自己への存在への問いが有ったはずである。

更に、これまた人類の歴史の初めまで溯って考えられる哲学も、本質的に、人間の存在への問いと答えの性格を持って成立して来た、と言うことができる。よく知られている如く、「哲学 *philosophia*」という語及びこの語が含み有する内実を人間の最重要事として位置づけ、基礎づけたのはギリシアのソクラテスであった。そのソクラテスの「哲学」の核心をなしたのは、彼がデルポイの神殿の破風にかかげられていた智慧の名句から選び択ってソフィストに対抗する武器とした「汝自身を知れ *gnōthi se auton*」である。自己認識こそ哲学の根本である。ソフィスト達にとっては、多識と、他人を説得し賛同させて利用する弁論術とが関心事であった。だが、ソクラテスにとっては、自己自身に関する無知、否むしろ、本来知られざるもの、知識によって忘却されているものに目を向けさせる産婆術こそ第一事をなした。多識や弁論術においては、知識や能力が使用される方向やその適用範囲や限界は問題にならない。それが問題になるのは、知ることと知る主体としての人間自身とが全体として人間自身に問題になるときである。そこで哲学が人間の中に現実性を得て、人間が根源的に哲学する者となるのである。このソクラテスの哲学、知識ではなく、知識の知識、知る者自身の知がその後の哲学の歴史を決定したことは言うまでもない。人は常に、哲学において人間の存在を問い、人間の存在への問いと共に哲学することを始めた。

同様の自己の存在への問いは、個人が成長する過程において、何ら

かの仕方ですばつからざるを得ないものでもある。個人が子供から大人になろうとする青年期に、意識が深化し拡大するにつれて、自己に無限な可能性が開かれて来る。それまで有限なまとまりを持って閉じられていた彼の世界が一旦破れて、無限に開かれた世界となる。そのとき、その無限に開かれた世界の中で、彼の有限な存在は彼自身に對し一つの疑問符になるのである。

「この無限な、果てしなき宇宙の中にボツンと有る自分とは一体何であるか」と。

それ故、人間の存在が人間自身に問いになるということは、人間の歴史において常に起ったことであり、現代において生じた特に事新しいこととは言えない。むしろ、人間の存在への問いは、人間誰でもにとり本質的なことである。人間とは、元来、自己の存在を問う者、その存在がそれ自身にとって問いとなる存在者である。

第二節 人間の全体が問われる現代

人間の存在への問いが人間に本質的に属していると見る限り、あらためて現代を人間の存在が問いになっている時代と特徴づけることは当を得ていない、と言わざるを得ない。現代に限らず、人間は、いつでも何らかの仕方ですらの存在が自己自身に問いとなる形で人間になるのである。

それ故、私がここで、現代を人間の存在が世界の全体と一つに大きな問いになっている時代と特徴づける場合、それは、過去において、絶えず、人間が人間であるところで、人間が人間自身に問いとなって

来たのとは、質的に違った状況が現代の人間に生じていることを意味している。つまり、私は人間の存在が人間自身にとって謎であるという人間の本質的性格が、現代において初めてそれとして全体的に顕わになった、と考えるのである。

過去において人間の存在が人間自身によって絶えず問われたといっても、それはまだ、いずれも常に、部分的にだったと言わねばならない。人間の全体が問いになって来たのはようやく二十世紀後半の現代に至ってである。現代においては、人間の問題はどんな部分的個別的なものであっても、それが直ちに全体としての人間に関わって来る。部分的個別の問題において直ちに全体が問われる。そして、この全体の問題が直ぐに部分、個別の問題として現象して来る。我々はまさしくこの点に、現代における人間の問題の本質的性格を見ることができるのである。

第三節 「分裂」の時代としての近代

近代における人間とその世界の顕著な特徴は、あらゆる局面に多様化、分化の傾向が見られる点にある。この、多様化、分化の傾向は個人としての人間の有り方にも見られるし、対象の世界、またその認識としての学問においても見られる。それはまた、現実の社会や世界の有り方においても現れている。そして、更に、それは、人間の歴史の動向全体についても指摘し得るものなのである。

我々は、人間の歴史において、「近代 modern ages, Neuzeit」がいつ始まり、更に、その「近代」から「現代 present age, Gegen-

wart」への移行が大凡いつ頃から起ったか、明確に定めることができない。のみならず、そういう時代区分をするに当っては、それに先立って、人間存在の根本的理解とその歴史的展開の筋道の把握とが不可欠である。時代区分の問題は、根本的には、歴史哲学の問題である。そして、歴史哲学の問題は、歴史的存在としての人間存在の問題である。

それ故、いかなる人間の有り方を中世的と考え、どのような人間の存在形式を近代的となし、更に、近代的人間の有り方の帰結と見られる現代の人間の有り方の根本をいかに把握するか、ということが既に哲学的な問題をなすのであり、歴史に向ってかかる問いを発すること自体が哲学的思索の課題をなすのである。従って、近代的人間及びその世界の根本的特徴の把握ということも、我々は簡単に片付けてしまうことはできない。近代を見る眼はそのまま現代を見る眼であり、人間を見る眼である。哲学的思索においては、過去と今、歴史と現代とは一つに結びついている。哲学的に現実に行きることと人類の歴史を全体として荷うことは同一のことの二面である。

そういうわけで、近代の人間をどのようにに捉えるか、ということ自体が哲学的には一つの大きな問題をなすのであるが、ここでは、近代という時代を、一応、人間と世界のあらゆる局面に多様化、分化の傾向が進展した時代という風に特徴づけておくことは許されるであろう。近代のこのような特徴づけからは、中世は、反対に、人間と世界に「一」、統一が成り立っていた時代だ、と言える。中世のその「一」、統一点は、無論、キリスト教の神に求められた。だが、近代は、人間

が神から独立して自由になる時代、「人間」、「自由」が基本概念になる時代である。そして、そのことと一つに、近代において、人間も、またその世界も、多様に分裂する事態が生じたのである。

近代のそうした事態を、例えば、現代の哲學家ヨハネス・ヒルシュベルガーは次のように、極めて的確に叙述している。

「かかる分裂は、実際、近代哲学の精神にとり固有なことであるように思われる。分裂がこれ程の規模において現われたことは、古代にも無かったし、況して中世には無かったことである。だが、今日、曾って近代の文化意識の分裂と呼ばれた事態が愈々多く生起し、拡大しつつある。個々の国々が独立して諸民族が分裂し、また、諸国家や諸民族と共に、西洋の精神とその統一的世界観もまたバラバラに分解している。単に、理論理性と実践理性、知識と信仰、宗教と形而上学、政治と道徳等が分離され、それらのいずれもが、自立せしめられたばかりではない。哲学の問題、その方法、その諸理論も無数に多く現われて、人々がもはや相互に理解し得なくなり、哲学の学会は皆、バビロンの言語混乱の如き感じを与えるようになり、ついには、精神が自らに絶望して、意識の上位に無意識を置くことによって自殺するに及ぶというようなことまで起った程である⁽¹⁾」と。

ヒルシュベルガーの述べている如く、近代の人間に起った最も特徴ある事柄は、「分裂 Zersplitterung」だ、とも言い得る。しかも、総じて、近代においては、近代的人間のかかる「分裂」がそれとして問いとなることは無かったのである。人間の存在にその構造の構成契機として含まれた諸方向がそれぞれ自立し、無限に拡大展開した時代、

しかも、そうした拡大展開と共に生じた「分裂」の事態がまだそれとして全体的に問いとなることの無かった時代、従って、一般的には、人間が自らの持てる諸能力の自己展開とその諸成果とに自足し、疑問を抱くことの生じなかった時代——それが近代だ、と言ってさしつかえないであろう。

そして、私は、現代を、まさしくそういう近代的人間の有り方が全体として人間自身に問いとなった時代として見るができる、と考えるのである。簡単に言えば、近代は、人間と世界の無限な「分裂」の時代、それに対して、現代は、そうした「分裂」の事態が人間と世界自体に對し、問いとなった時代である。

我々は、こういう視点から、先に述べたような、近代が一体どの頃から現代へと移行し始めたか、といった問い、あるいは、更に、現代において哲学が直面している最重要課題は何であるか、結局、現代の人間はいかなる問題状況にあるか、人間存在の現代における姿、つまり、「人間の現在 presence of human being, Gegenwart des Menschen」というものをいかに把握するか、というような問いに対する答えを得ることができるのではあるまいか。

註(1) Hirschberger, Johannes: Geschichte der Philosophie 2, S. 4f.

第四節 現代人の有り方の問題性

ヒルシュベルガーが述べているような近代の人間の意識の「分裂」という事態、そして、それと一つに、それが現代において全体的に問題化している状況を、我々は次に具体的に、人間の様々な営為をなす

ものについて考えてみることにしよう。そのことは、結局、現代の諸現象の問題的な性格を手がかりにして現代における人間の根本問題を明らかにすることを意味する。

1 現代の教育の問題性

近代の人間において、そして、特にその帰結としての現代の人間において、「分裂」が表に現われていることの一番身近な、はっきりした例証は教育に見出される。

教育は元来、知識や技術の伝授や才能の引き出しであるよりも、むしろ、人間形成、「教養 *Education*」である。つまり、個々人を個人的社会的な全体的存在として、一個の人格として育成するのが教育の本義であり、知識や技術の習得はその一契機をなすに過ぎない。

だが、しかし、今日、教育は、そういう人間の自己形成の意味を失って、むしろ、極めて煩雑にして膨大な知識や専門化した特殊技術の伝授習得だけになってしまった観がある。大学入学を最終目標とする受験準備の学習体制は、年を逐って強化され、低学年次まで引き下ろされて、今日では、小学校から幼稚園の児童までまきこんでいる。普通の公立の小・中学校とは別に、受験準備を主方針とした私立の学校が林立し、更に、こうした受験準備校に入学するための準備をする私塾が町に溢れ始めている。そういう受験準備の学習は、総じて、知識の暗記と種々のパターンの問題に対する解答技術の習得とにのみ向うのであるから、それ自体は全人的人間形成をめざすものではないのである。

と言っても、そのような学習が人間形成にとり全く無益だ、というわけではない。自然科学や社会科学の諸成果や様々な文学作品を知り、吸収することは、むしろ、現代の人間の基本的教養に属するからである。

従って、問題は、そうした知識の内容よりも、むしろ、そういう内容を持った知識の学ばれ方、知識を習得して、自らの知識となす仕方に存する、と言わねばならない。つまり、学習が知識の暗記と種々の問題への解答技術の習得を意味するのであれば、それらは、今日、大小あらゆる種類のコンピュータが人間とは比較にならない量、スピード、正確さで行っていることである。だが、人間がコンピュータのように記憶し、思考するように訓練することが、そしてまた、そのような訓練の成果を競い合い、更に、その成果の度合によって個人の価値を判定するというようなことが、全体としての人間の形成の中に占める位置を考えると、我々は、そういう学習の有り方の深刻な問題性を目を見開かざるを得ないのである。記憶による多識や反復訓練により獲得される思考技術は人間の存在のごく一部をなすに過ぎない。知識の領域だけに限って考えても、実際には、記憶や技術的思考と同じ位に、あるいはより一層重要なのは、対象に対して驚いて抱く疑問とか、対象の統一を一挙に見る直観力とか、対象の秩序連関を把握する構成的思维とかであるが、こういう能力は今日の学校教育の通常の方針からは取り残されてしまう。人間の知性は元来相互に異なった諸能力の全体的統一として発展するものである。だが、記憶や技術的思考のような、むしろ知性の表層をなすというべき能力の鍛練方式がメカ

ニックな体系に整備され、それが自動的に機能するとき、人間的知性の全体的発展は阻害されざるを得ない。すなわち、現代の学校教育が記憶や技術的思考の修練に偏したことにより、人間知性の「分裂」が強まったのである。しかも、かかる「分裂」は現代世界のあらゆる人間の運命となって来ている、と言わねばならない。

知識が人間形成に働くためには、それが全体の中に正しく位置づけられながら、真に自己の知識となるのでなければならぬ。つまり、自己によってその内容が経験されるのでなければならぬ。そして、そのときには、知識の学習が直ちに道徳性の深化の意味を持って来るはずである。なぜかといえば、知識への誠実と自己の行為の誠実とは次元を異にしながら、根本において一つをなすものだからである。知識への誠実、一々の対象の法則への従順によって、実は、その都度自己の普遍的にして必然的な根底が確かめられるのであり、ここに、客観化され、体系化された知識や技術を習得することの人間形成における本来の意味が存するのである。知育は徳育と密接に関わっている。真の知育こそ徳育である。

例えば、我々が幾何学の一つの問題を解く場合を考えてみると、それは、我々が決して勝手気ままになし得るものではない。それは三角形や円の公理や定理を一つ一つ踏まえ、順序に従って初めて行い得るのである。そこには、客観に対し、図形の法則に対し自らを無にすること、ということがなければならない。そして、そこで、苦心して一つの問題が解けるということ、図形を統べている法則が見出されることは、その都度常に全く新しい真理の現成であり、学習者の感動的な自己発見

なのである。対象と主観との一致の神秘的ともいうべきことである。我々は幾何の問題を一つ解くことにおいても、真理への畏敬、真理の探求の至難さ、しかも、手順を踏んで真理を見出したときの驚嘆と喜び、秩序に従って思考して行けば、真理は必ず恩寵の如く与えられるという確信を学ぶのである。かくして学習者が自らのものとした真理、例えば、ピタゴラスの定理、「直角三角形の斜辺の平方は他の二辺の平方の和に等しい」の如き命題は、古くしてしかも常に全く新しい真理であり、学習者自身の真理である。人は、常に客観的知識の獲得を媒介として自己発見し、自己実現して行く。もし、現代の教育体制に根本的な問題が有るとすれば、それは、知識偏重の教育の有り方よりも、むしろ、知識を自己化する仕方、つまり、今日、知識の学習に含まれるその都度新たな真理発見と自己発見、自己実現の意味が捨象されて、記憶と概念操作のメカニズムの習得に終始する実状に求められるのである。そして、それは、科学技術の世界像によって方向づけられ、導かれた現代の人間知性の有り方の本質的問題だ、と言える。

科学技術の発達に伴なって、人間知性の「分裂」が問題化したのは既に近代のごく初めの頃から見られることであり、その「分裂」を埋め合わせるものとして、例えば、十八世紀後半のドイツで、ゲーテ、ペスタロッチその他の人々により「教養 Bildung」ということが言われ出した。「啓蒙」の、つまり専門的知識の技術的に方法化された開発という教育観に対し、これらの人々は、人間の精神的形成の全過程を重んじたのであった。日本でも、大学教育の専門化に伴なう知的な

アンバランスを補うものとして「教養」が重視されたことがある。

だが、科学技術的世界像における知性の「分裂」という事態は、「知る動物」としての人間の知の有り方自体の問題性に発しているものなので、「教養」とか、あるいは「情操教育」とかのようなロマン主義的理念だけでは、問題の解決はできないはずである。先にも述べたように、ここには、対象知の一事が直ちに主体知を覚ますような立場、科学的知識や技術の習得がそのまま自己発見と自己実現に転じ得るような観点がどうしても必要である。

そういう視点を今ここで、予めはつきりと提示することはできない。しかしながら、問題解決の指針となるものの一つは、カントの哲学である。『実践理性批判』の結語冒頭で、彼は次のように述べている。

「私がそれを度多く且つ持続して熟慮すればする程、常に新たな、また愈々強まる讃嘆と畏敬によって心を充す二つのものがある。それは、私の上なる星の輝ける大空と私の内なる道徳法則 *der bestimte Himmel über mir und das moralische Gesetz in mir* である。この二つのものを私は暗黒の中に閉ざされたものとして、あるいは超絶的なものの中に隠されたものとして、私の視野の外に求めて単に推測したりするようであってはならない。私はそれらを私の前に見て、私の実存の意識と直接に結合するのだからである⁽¹⁾」と。

ここでカントは、人間の心に顕わになる二つの法則について語っている。「私の上なる星の輝ける大空」と「私の内なる道徳法則」とである。彼は、それを度多く且つ持続して熟慮すればする程、常に新たな、また愈々強まる讃嘆と畏敬によって心が充たされる、と述べて

いる。私の外の自然法則と私の内の道徳法則とは互いに秩序を異にするのであるから、決して一つにはならないし、一方から他方を導き出すこともできなければ、一方の法則の究明によって、自ら他方の法則も明らかに成る、という性格のものでもない。道徳法則に注目するときは、自然法則は無に等しいものとなるのである。

だが、それにもかかわらず、二つの法則は、同一の心に属する法則として、心において一つに結びついている、と言わねばならない。自然の法則性は道徳の法則性から次元的に区別されながら、これを表徴しているのである。従って、自然の法則に常に新たに讃嘆し畏敬の念を覚える者は、必ず更に、自然を無限に越えた内なる現実、つまり自由の現実においても法則を見出し、讃嘆と畏敬の念を覚えるに到るであろう。そして、ひとたび現実の法則性に目を開かれた者、現実の理法への感覚を得た者は、「外」の方向にも、また「内」の方向にも、無限に深まり行き、更に精緻に種々の理法を発見するであろう。——もっとも、その場合には、自然と道徳というカントの二元論的枠組だけで存在の理法を考えることは十分ではなくなるかも知れないが。

註(1) Kant, Immanuel: Kritik der praktischen Vernunft, Akad. V., S. 161.

2 現代の医療の問題性

今、教育について見た人間の存在の「分裂」といた事態は、現代の人間のあらゆる営為において認められるものであるが、次にはそれを医療について少し考えてみよう。

人間も生物の一種であるから、「生・老・病・死」を免れることはできない。生物として人間は生れる。生れたら、必ず病氣にかからねばならないし、年を取らねばならない。そして、病氣が老衰かによっていつか死なねばならない。医療とは一つの人命救済の行為であるが、具体的には、人間の生命の逃れられない運命である四苦、「生・老・病・死」に対する科学技術的挑戦だ、と言うことができる。

医学及び医療技術の進歩によって、近年、この戦いの成果には実に目覚ましいものがある。曾つては困難であった受胎調節や中絶手術、あるいは未熟児哺育や不妊の問題の解決がごく普通にできるようになった。老化の開始年齢が遅らされ、その進行速度も大幅にゆるめられた。病原菌やウイルスとそれらを殺す薬品の発見により、あるいは手術方法の驚くべき発達によって、これまで不治と思われていた病氣の多くが克服された。死を人間から追放することはできないにしても人工臓器や医療機器により、死期を引き延ばすことはできるようになった。

かくして、曾つては人生五十年と言われていたのに、今日では、平均寿命が七十歳から八十歳にまで伸びるようになった。人類は四苦そのものは克服できないとしても、四苦を技術的に操作することはかなりなし得るようになった。つまり、医療技術の発達により、人間の身体的生命の力が著しく強化され、これに対する否定的な力（老・病）に制限が加えられ、また、自然な誕生や死もコントロールされるようになったのである。

だが、周知の如く、人間の身体的生命を維持し高揚するために、自

然的な生命に纏繞していた否定的な力を技術的に除去し、追放しようとしたら、あるいは、誕生や死をもコントロールしたりすることが人間の生活の有り方を根本的に変革するのみならず、そのこと自体が新たな、解決困難な問題を引き起している。それは、根本的には、生命に機械的に把えて処理できる面と、絶対にそうしてはならない面とが有るからであるし、また、特に、人間の生命の場合には、単なる身体的生命の維持や高揚が存在の窮極的意味となることは有り得ないからである。現代の医療の問題は、皆この二つの点に関わって生じている、と言うことができる。そして、それらの問題は、いずれも、現代の人間の存在の基本の「分裂」を指し示しているのである。

一九七〇年代の中頃に、アメリカの或る病院で、遺伝性の免疫機構欠如の有る双生児が、完全滅菌した特殊なガラス張りの密閉室の中で育てられている記事が写真付きで雑誌に出たことがある。彼等は、空气中に浮遊していたり、床や土の中にも生息していたりする細菌やウイルスに対する抵抗力が先天的に全く欠けているので、無菌室から一步でも出れば、直ちに死なねばならない、ということであった。二人は、双生児であるが、室内で取っ組み合いなどをして事故が起ってはならないので、彼等相互の間もガラスの壁で仕切られている。飲食物は無論完全殺菌されて差し入れられる。彼等は両親とも特別の窓を通して手を握り合い、マイクで話しかうことができるだけである。その後、報告を見ないので、この二人の少年がどうなったか解らないが、彼等が尚生存しているとすれば、依然としてあの無菌室の中でであろう。あのガラス張りのカプセルの中で、彼等は勉強したり、

ボール遊びをしたりしているのであろうか。彼等はおそらく成長しても、あの狭い部屋の中で生涯を送らねばならないことであらう。

この双生児の場合は極めて特異な例である。しかし、これに類することは、今日、世界の到る所の大学病院で見られることである。過去において不治とされていた病気で、今日手術や医療機器により辛うじて延命が可能にされる場合、事態は皆同じ性格を持っている、と言うことができる。あるいは、純粹無菌の状態のカプセルの中の飼育は、広く、現代文明に生きるあらゆる人間の姿の一つの象徴でもあるであらう。

例えば、過去においては、先天性心臓奇形の小児は助からなかった。だが、今日では、異常を発見して直ちに手術をすれば生命を救われて長く生きることができる。しかし、そのようにして助かっても、日常の生活ができない子供の場合は不幸である。彼等はいつ突然爆発するか知れないダイナマイトを抱えて生活しなければならない。

同様のことは、腎不全の治療に使われる人工腎臓による透析の方法についても言い得る。従来、尿毒症によって七〇—八〇パーセントの人が死んでいたこの病気の場合も、透析療法という、積極的に腎臓の機能を代行する手段が考案されて、患者の延命や社会復帰も可能になった。だが、ひとたびこの療法を始めた患者は自分の生命を完全に病院の機械とその機械の治療を受けるための外的条件とに依存させた形で生活しなければならない。彼は、生涯週二、三回病院に通い、その都度六—八時間機械に身体を預けねばならない。もし、何らかの事情で——例えば、機械の故障、患者の家庭の経済的窮乏等——透析が受

けられなくなれば、それは直ちに彼の死を意味するのである。しかも、この病気には完全治療の可能性が無いから、唯生き延びるために治療を続けて行くことになるが、その間には、色々の合併症の生ずることも十分考えられるので、長く生きれる確率は少ない。

医学及び医療においては、「生命の尊厳」、A・シュヴァイツァーのいわゆる「生命への畏敬 Ehrfurcht vor dem Leben」が最高原則である。いかなる場合でも、患者の生命を可能な限り死の力から解放し、延長させることが鉄則である。この鉄則に基づいて、近代の医学と医療技術とは発達したのであった。

だが、今日のように、医学が、専ら化学的物理学的に処置をして生命を延長するようになったときに、医療の意味自体が問題化した、と言うことができる。なぜなら、そのような仕方では、機械につながれて、自らも機械の如く、唯生き延びるために生き、治療を受け、また、治療を受けるために生き延びるような有り方は、決して人間の本来の有り方とは言えないからである。生命体には機械の如く見ることできる面と、そう見ることのできない面とがある。生命自体は機械的なものではない。化学的物理的なものではない。むしろ、それは化学的物理解学的なものを貫き、それを身体となして使って生きるものである。それはそれ自身の中から、働く、純粹な意志である。生命体の身体の各器官と全体との関係は、自動車やコンピューターの部分と全体との関係とは違う。生命体の場合は、どの部分も全体に属し、全体を表わしている。また、全体は、諸部分の有機的連関によって成り立っている。決して部分の集合によっては生命体とはならない。また、生命体には

環境が有る。環境において、その表現として各個体が生まれる。そして、また、個体の活動により、環境が作られて来る。両者は連続するものではないが、不可分である。生命とは環境により形成されつつ環境との相関において自己形成する意志である。

現代医療の問題点は、この、部分と全体、個体と環境の矛盾的統一である生命体を抽象的に、機械論的に把握するところに有る、と考えられる。勿論、近代医学も根本的にヒューマニズム、個体の生命の尊重の思想の上に成り立っているのであるから、その機械論的身体観やそれに基づいた医療技術も、患者の生命の救済という目的に奉仕するものであることに变りない。問題はむしろ、個体の物理的時間的延命のために、個体を成り立たせている有機的全体の関連が犠牲にされるところに有るのである。機械が人間の生死の鍵を握るとき、生命は根本的に機械に従属するものとなり、自ら機械の部分品の如き有り方をなすに到ることになる。生命の維持を目的に考え出された技術によって生命の根源性が閉め出されてしまう。我々はここに、現代の医療において、先に言った、人間性の「分裂」の事態を見ることができるのである。つまり、「生命の尊厳」と言われる場合、その生命とは実は、部分と全体、個体と環境が矛盾の統一として自己形成する構造に成立しているものであるが、現代の医療は個体の生命の物理的時間的延命のために、生命の基本構造を切り捨てて機械を導入する、そして、機械による、個体の生命の延長を生命尊重の倫理的行為とみなすのであって、そこに人間の、生命に対する姿勢の「分裂」が出て来ることになるのである。

無論、人間の身体も、近代の初めにデカルトが把えたように、そして、近代医学がそれに基づいて発達することができたように、非常に精巧に作られた一種の「自動機械 automate」と見得る側面を有している。そうであるからこそ、身体の一部を切除したり、交換したり、あるいは、人工臓器で補ったりすることも可能なのである。今日、我々はこのような医療の有り方とその進歩の可能性を否認することとはできないし、そうすべきではない。また、いかなる人も、患者の回復や延命の可能性の確率を予め算定することはできないのであって、家族も医療技術者も可能なあらゆる手段を傾けて治療と看護を続けるのであればならない。

しかし、このことを確認した上でも、機械に人間の生命が依拠している有り方、あるいはそのような生命観や医療観は問題である、と言わねばならない。臓器は生命体全体の部分であって、全体を貫く生命そのものが部分に基づくことはあり得ないからである。機械論的身体観は生命の全体性の中に限界づけられ、正しく位置づけられるべきである。医療は結局医療に過ぎない。人間の「生命の尊厳」は物理的時間的延命の彼岸である。そして、この生命には、四苦、「生・老・病・死」が構造的に属しているのである。生における否定的なものを抽象し、機械の支えによって量的に無限な生命を得ようとする試みは実は虚しく、生死対立以前の全体的統一としての生命の現在からは、むしろそれからの逸脱である。

現代の医療が直面している問題は、実は現代の人間の生の根本問題である。一般には、医療の進歩に伴なって生ずる種々の危険や医療従

事者の倫理が問われている。しかし、根本的には、現代の人間の生の有り方自体が問われているのである。つまり、量的生命の技術的引き延ばしへの努力に生命の窮極的意味や人間性の証しを見出そうとするところに、現代の人間の生の「分裂」と共に虚無性が存するのである。古来、「不老長寿」は人間の最も大きな願望であった。だが、「不老長寿」そのものが決して人間にふさわしい生とはならないこと、しかもそれにもかかわらず、人間は「不老長寿」を願望の対象として追求しつづけること——現代の医療の問題性は、人間存在のこの根本矛盾をそのまま露呈している、と言い得る。

註(1) Descartes, René: Discours de la méthode, 5. part.

3 現代の環境の問題性

現代の大きな問題の一つは、人間をとりまき、全体として人間の生存の条件をなす世界、いわゆる環境の有り方である。現代において初めて、人間がそこに生れ、それによって限定されつつそれを限定する形で自己形成し、そこに死にゆく世界がそれとして問題化したのである。

勿論、環境が大きな問題となるということは、過去においてもしばしば起ったことである。大きな天変地異の後では常にそうであったし、人為的にも、例えば、曾つてローマ帝国の穀倉地帯であった北アフリカが、過度の農作利用により土地が痩せてしまい、放置され、風化作用にさらされるうちに、遂に広大な砂漠と化した、というようなことは有ったのである。

しかしながら、単に個々の環境の変化でなしに、人間と環境との関係がそれとして全体的に人間にとって問題化したのは、やはり、およそ二百年前に始まった産業革命とそれに続く技術による世界の変革が人間の生活の仕方とその基礎としての環境とを急激に変え、人間の存在のあらゆる領域に不調和と解体の現象を生ずるようになってからである。人間をとり囲む世界を技術的に変革して、人間が世界の主になって行こうとするとき、そのような変革が進行するにつれて、人間によって変革された世界が逆に人間を支配するようになるという、人間と環境との関係の不条理は、実は既に人間が道具や火を使い、農耕を始めたところに存在するのであるが、それがそれとしてはつきりした形を取って現われて来るのは、道具が機械に代り、変革された世界自体も全体的に機械の様相を呈して来たときである。技術が人間の本質の一つをなすことは言うまでもないが、現代では、人間のこの本質の展開によっては、遠からず人間自身の生存が危くなることが単に推測されるばかりでなく、種々の観点から学問的にも証明されているのである。人間がその「進歩」を無限に追求する有り方及びその結果によっては、決して人間存在の充実に至ることができないことを、技術的に変革された現代の世界が実証しつつある、と言える。

曾つては、土中内蔵資源であれ、原野であれ、森林であれ、それらを「開発 exploitation or development, Erschließung od. Entwicklung」することは、直ちに人間の進歩を意味していた。「開発」は人間の知性の「啓蒙 enlightenment, Aufklärung」に対応する客体的変革として、無条件に人間を幸福に約束するものと考えられた。それ

はまた、自然についても、自然の「発展 Evolution」の新段階と見られたのである。例えば、フリードリッヒ・デッサウアーは技術に「人間精神の原素質 *Uranlage des menschlichen Geistes*」としての形成欲の発現を見るが、自然は、人間のこの創造的活動により、一種の「継続的創造 *creatio continua*」の形を取って更に発展完成させられる、と述べている⁽¹⁾。

確かに、人間の自然支配は、機械の登場と共に、原理的には、最終段階に到達した、と言い得るし、自然の方から言っても、そのことは、自然の中に含まれ隠されていた法則が最も純粹な形で顕現したことを意味している。人間がロケットで月に到達して無事に帰還したとき、あるいは、遺伝子の構造を解明して、生物の種の技術的改造をし始めたとき、あるいは、大都市の高層ビルの一室の小型コンピュータに、世界の各地から送られて来る情報を記憶させ、ごく短い時間に、経済のデータの整理と分析と判断、将来のなりゆきの予想をすることが可能になったとき、我々は人間の知性の測り知れない偉大さと、技術によって変革される自然の中に形を現わして来る自然の諸部分を貫く秩序性とを前にして、誰しも讃嘆と畏敬の念を覚えざるを得ないのである。

だが、しかし、今日では、技術による変革によって人間の生活の基礎条件をなす環境に生じた種々の問題的状况は、もはや全く樂觀を許さぬ様相を呈し始めている。あらゆる「開発」、進歩が人間の生活を脅かす危機を生み出す。そして、一つの危機が他の危機を誘発し、更に、いくつかの危機的症候が相乗して大きなパニックとなる。技術の

発達によって今日我々の世界に起っている問題は、単に個々の人間の日常生活に関係するのみではない。個々の人間の日常生活を左右すると同時に、地球上で生活を共にする全人類と全生物の運命を問うものとなっている。

現代のこの新しい批判的意識を最も明瞭に表わしているのは、例えば、『「この惑星が略奪される *Ein Planet wird geplündert*」(一九七五年)の著者ヘルベルト・グルールの次のような文章である。

「西暦千年代から二千年代への変わり目は、過去二世紀間に、我々の全環境の怖るべき濫用について、産業革命の結果として描写されて来た一つの発展の記念標となるはずである。陸であれ、海であれ、あるいは大気であれ、植物、動物、人間等の全生命領域が世にいわゆる進歩の犠牲に供された。この進歩は、結局、根本に帰って見るならば、元来、退歩であることが明らかなはずである。つまり、より多く生産し、より多く消費し、比較的短い期間を(北半球の工業国にのみおいで)より良い生活をすることができるために、原料が徹底的に搾取され、河川や海洋が汚水にされ、そして、大気が汚染されつつあるのである。これらのことが全て、結果を呼ばずにいない、ということとは、科学者達が以前から予言していたことである。しかしながら、ようやく今、我々の惑星が危険に当面していることがはっきりと見えて来るようになったのちに、『滅び行く宇宙船地球号』についての知識が愈々人間の意識に入ってきたのである⁽²⁾」と。

「滅び行く宇宙船地球号」——この言葉は、実に、前世紀末のヨーロッパ人の「没落し行く西洋」に対応する二十世紀末の人類全体のキ

ーワードである。この宇宙船がソドムの町となるか、あるいはノアの箱船となるかは、現代及び将来の人間の叡智と勇氣と努力とにかかっている。

だが、環境の危機、「宇宙船地球号」の死滅の危険を克服することは、極めて困難と言わざるを得ない。なぜかといえば、第一に、このような規模と内容の危機がこれ程急激に起ったことは曾つて歴史上に無く、我々は問題解決の先例を過去に求めることができないからである。例えば、イエスや釈迦に人生の原理的なものを見る場合でも、問題への具体的な対決の仕方は、イエスや釈迦では十分でないのである。そして、問題解決が困難な第二の理由は、この危機が、自然の征服という、人類の何千年かの願望がようやく次々に最終的に実現し始めたところで、その実現の結果として生じたものであり、今の時点で、人が急に願望を根本的に変更することは期待できないところに有る。我々は、まさしくこの点に、環境の危機を前にしての現代の人間の根本的な「分裂」を見ることができであろう。

技術文明により、大量の物が生産され、人口が増加した。だが、それと共に、大量の廃棄物とゴミが生じ、数十億年の長い時の経過の間に生れた生命空間の秩序が急に破壊され出した。更に、この文明は何かを燃すことにより、つまり、炭素を二酸化炭素に変えることにより発生するエネルギーで築かれるのであるが、このエネルギー源がやがて尽きることは明らかである。そして、また、人口が今のテンポで増加して行けば、近い将来、限り有る地表で生産される食料では不足するようになることも確かである。

このような現代文明に行きづまりを感じる人々の中には、文明そのものを悪とみなして、「自然への還帰」を主張する人も多い。だが、それは、実際には不可能であるし、人間の本性に適うことでもない。それに、今日では、もはや帰るべき自然の状態はどこにも無い、とも言わねばならない。

結局、文明の全体を認めつつ、しかもそれに全体的制限を加えることにより、環境を保護し、限り有る資源のロスを防ぐ以外に方法は無いことになる。そのためには、具体的には、生化学者野田春彦も言う如く、消費生活を縮小することが先ず考えられる⁽³⁾。より多く消費することが生活水準の高さを、また、いわゆる「開発」が人間の進歩を意味するのでない、という、価値意識の根本的転換が必要である。それはまた、「開発」により高度の成長を遂げる「経済 economy」よりも、環境保全をめざす「生態学 ecology」が常に優先されねばならない、ということでもある。

しかし、現実の人間の有り方は決して今でもまだこのような意識の根本的転換をするには到っていないし、況して、それを実行に移す個人や社会は極めて少ない。確かに、環境の危機の重大さの認識は強まっている。自然保護、公害防止の運動は一般市民の活動としても、また国家や地方自治体の政策としても推進され始めている。研究所や工場からの廃液の垂れ流しも、もうほとんどなくなった。だが、今日の環境の危機はこのような部分的措置ではすまない状況にある、と考えねばならない。一方では、自然保護、公害防止を行いながら、他方では、物質的豊かさ、経済的繁栄を追求する、いわゆる「緑」と「豊か

さ」の両方を欲する「あれも・これも Sowohl als auch」の合理的思惟方法こそ問題なのである。

例えば、今日、紙の消費量は生活水準と経済力を示すバロメーターとされている。ところが、紙の主成分のセルロースは、最後には、焼却されたり、腐敗させられたりして大気中の二酸化炭素になる。また、紙の製造のためには、地表にまだ残されている多くの森林を伐採することになるが、それによっても二酸化炭素が増大する。人類は、木材の他に、化石燃料を燃やしても大量の二酸化炭素を作っている。かくして、紙の消費量が増加することは、確かに、現代人のエネルギー消費量が増し、経済活動が活発になることを意味するが、同時に、それは大気中の二酸化炭素の急激な増加を起すことをも意味するのであり、やがては地表の多くの生物の死滅を招くことになる。

紙について考えられることは、他のあらゆる消費物資についても言い得るのであり、それらの相乗効果を考えるとき、我々は今日、既に地表の生物の自浄作用の限界を見得るところに來ている、と考えねばならない。「開発」の無限な推進と生命空間の全体的調和とは、やはり根本的に矛盾するのである。「経済」の発展と「生態学」による環境保全との相補的調和的關係は、人間の「自然」(理性)——その根本に種を維持高揚せんとする意志——と宇宙の「自然」——との調和を信ずる古き自然神学的宇宙論的世界観のオプティミズムに基づく一つのポストウラートであるが、現代の機械技術文明はまさにこのような調和を徹底的に否定する意志として現われて來ている、とも言わねばならない。調和を幻想として徹底的に否定する意志が、調和を彼方に要請

として立てる。我々はここに、現代の人間のその環境との關係における最も根本的な「分裂」を見るのである。

註(1) Dessauer, Friedrich: Streit um die Technik. 2. Aufl. 1958.

特にこの書の第三章。

(2) Fritz, Markus: Klipp und Klar, 100X Umwelt, S. 5.

(3) 野田春彦『生物としての人間』講談社、二五頁。

(原稿受理日昭和六〇年六月二十八日)